

「リオ・オリンピック」が終わって

南米で初めて開催された「リオデジャネイロ・オリンピック」が終わった。日本が獲得したメダル数は金：12個、銀：8個、銅：21個の合計41個で過去最高となった。連日、深夜から明け方まで、手に汗握りながらテレビの前で一喜一憂、興奮冷めやらぬまま心地よく眠りにつけたが、若干寝不足気味となる毎日であった。

女子重量挙げ三宅選手のラストチャンスで成功させての涙の銅メダルに始まり、最後は男子陸上400mリレーでの想定外の銀メダル獲得まで、連日感動する場面が実に多かった。特にドラマチックで印象に残った種目について、時系列的に以下に挙げてみたい。

1) 体操：男子個人総合内村（金）、男子団体総合（金）

種目別で金メダルが期待された得意の鉄棒予選でまさかの落下（決勝へ進めず）、その先大変心配されたもののさすがは「王者内村」、個人総合決勝最後の種目鉄棒で、今度は完璧な演技で2位のウクライナ選手に僅か0.09の差で逆転優勝。これはまさにドラマだった。加えて嬉しかったのは男子団体総合の優勝で、種目別では白井選手が唯一床で銅メダルを得ただけなのに、いかに日本チームの総合力が勝っていたかを物語るものだった。

2) テニス：男子シングルス錦織（銅）

準々決勝での対モンフィス戦、ファイナルセットでタイブレークにもつれ込み、トリプルマッチポイントを握られて絶体絶命、もはやこれまでかと思われたものの、そこからの大逆転で見事勝利し、準決勝では難敵マレーに敗れたが、3位決定戦でこれも難敵ナダルとの大激戦を制しての見事な銅メダルだった。錦織にとっては賞金もランキングポイントも関係ないオリンピックではあるが、国を背負って必死に戦い、ナダルに勝利して日の丸を肩にかけながら流した涙は輝いていた。

3) 卓球：男子シングルス水谷（銅）、男子団体（銀）、女子団体（銅）

中国勢を中心とした強敵に対し、シングルスでは過去男女ともメダル獲得がなかったが、ついに水谷選手が見事に銅メダルを獲得した。加えて男子団体は銀、女子団体は銅を獲得したが、女子団体ダブルスでは27歳になった福原愛選手が、一回り違う15歳の伊藤選手と組んで戦った。3歳頃の「泣き虫愛ちゃん」を知る身としては、時の流れを実感するとともに、若手の急速な成長を目の当たりに、今後大いに期待したい種目である。

4) 柔道日本の復活：男子全階級メダル獲得（金2、銀1、銅4）、女子5階級（金1、銅4）

男女それぞれ7階級を戦い、合計金3個、銀1個、銅8個のメダル獲得は、一時期低迷していた日本柔道界の復活を予感させられるもので、東京では更に上のメダルを目指して大いに頑張ってもらいたい。

5) レスリング：女子（金 4、銀 1）、男子（銀 2）

特に女子の活躍は素晴らしく、伊調馨選手の最後 10 秒間での逆転勝利・4 連覇は見事であった。一方、吉田沙保里選手は僅差で 2 位となり、本人は日本選手団キャプテンとしての責任を感じ悔し涙を流していたが、恥じることもない実に立派な銀メダルであった。

6) バドミントン：女子ダブルス高橋・松友（高・松）ペア（金）

決勝の相手は長身（平均 180cm 近く）、一方「高・松」ペアは平均 160cm 強で、相手の高い打点からのスマッシュに翻弄され 1 セット目を取られた。何とか 2 セット目を凌いで最終セットに持ち込んだ。最終セットは一進一退、見ているこちらの肩が凝るような展開となった。終盤 16 対 16 から相手の連続ポイントで 16 対 19（21 点先取制）となった時、その流れからしてほぼ敗戦（銀メダル）を覚悟した。

ところがどっこい、ここから松友選手の前衛での積極的な攻撃が功を奏し、5 連続ポイントで見事 21 対 19 の大逆転での金メダルが決まった瞬間、思わず二人のコーチがコートになだれ込んで一緒に喜びを爆発させていたが、見ていた自分も全く同じ心境であった。

7) 陸上男子 400m リレー：山県、飯塚、桐生、ケンブリッジ飛鳥（銀）

1 走の山県選手のスタートダッシュの良さ、2 走の飯塚選手の粘り、3 走の桐生選手のコーナーワークの上手さで、4 走のケンブリッジ飛鳥選手にはほぼ先頭でバトンが渡った。さすがにボルトには後半離されたものの、3 位と胸の差（2/100 秒差）の 2 位でゴールした瞬間、半信半疑でおそらく日本中が「想定外の銀メダル」に沸き立ったことであろう。

大会のラストに近いこの競技での銀メダルだったが、男子 100m の決勝にはこの 4 名の誰もが残れなかった中でのこの快挙、今大会の日本人選手のチームワークの良さがここに凝縮されたような結果で、まさに有終の美を飾るにふさわしい最高のフィナーレとなった。

「リオ・オリンピック」が終わったの個人的感想

1. 大会が始まっての 2 週間あまり、日本人選手の活躍に連日大いに盛り上がった。そして改めてスポーツの持つ力、見ている我々国民に感動を与えるその影響力の大きさを今回もまた実感した。
2. 個人種目での勝利もさることながら、団体での勝利はメンバー全員の喜びが伝わり、それを我々も一緒に共有できた場面が実に多かった。（体操男子団体、陸上男子 400m リレー、卓球男子団体、卓球女子団体、水泳競泳男子 800m リレー、水泳シンクロナイズドスイミング・チーム等）
3. 陸上男子 400m リレーで銀メダルが確定し、4 選手が日の丸を肩にメインスタンド前を一周する姿は実に感動的であった。なお体操男子団体総合で優勝し、その表彰式で内村選手を筆頭に、メインポールに上る日の丸を仰ぎ見ながら、5 人が大きな声で「君が代」を斉唱する姿も実に素晴らしい光景であった。

4. 大会が終わってからの NHK の特別番組で以下の事実を知った。

イ) 体操の内村選手の身体は限界に達しており、団体戦ではその負担を最小限に抑えるため、5人の演技種目の順番を様々検討変更し、何とか最後の床の着地で踏みとどまることができ、ぎりぎりですでた金メダルだったそうである。

一方、個人総合でもライバルのウクライナの若手選手に、最終の鉄棒の前まで0.9ポイント差でリードされ、最後は開き直っての完璧な演技で、逆に僅か0.09の差での大逆転優勝となったが、結局はメンタル面が勝敗を分けたそうである。

ロ) 同じく金メダル（水泳競泳男子400m個人メドレー）の萩野選手も、一般には予想通りの優勝とされているが、実は予選で3位のタイムとなった時には「弱気の虫」が頭をもたげ、決勝直前は眠れずにそのプレッシャーは半端ではなかったそうである。最後はコーチのアドバイスもあり、開き直ることでの金メダル獲得とのことだった。

5. テニスの錦織選手など、賞金もなくランキングポイントも関係ないオリンピックで、海外の有力選手が出場を辞退するケースが多い中、自ら日の丸を背負って戦った訳だが、果たしてそのモチベーションは何だったのであろうか？

MLBで活躍するイチロー選手なども同様のようだが、日本を離れ海外で転戦する中で、自分が日本人であることの誇り、アイデンティティーを強烈に意識するのだそうである。振り返って我々は国内にいても、もっとそのことを普段から認識すべきなのであろう。

6. ベテランから若手への世代交代が図られ、好循環でのレベルアップが期待できる種目が多いのは嬉しい。（卓球、男子体操、女子レスリング、水泳、女子バドミントン等）

一方で、マラソンのように、かつては金メダルも獲得した競技で、入賞者もなく全く不振だった種目もあり、実に残念だった。早急な立て直し策が必要である。

（後書き）

大会が始まる前は、様々な懸念のあった「リオ・オリンピック」ではあったが、何とか無事に終了した。日本にとっては4年後の2度目の「東京オリンピック」開催に向けて、大きく弾みのついた大会となった。

今大会では様々な競技で日本人選手が大活躍したが、これを見た若者たちには4年後の「東京オリンピック」を目指し、夢を抱いて大いに頑張ってもらいたい。

そして我々シルバー組は冥土の土産に、2度目の「東京オリンピック」をこの目で見るため、早速明日からは若者たちに負けずに、せめて彼らのため「縁の下の力持ち」位にはなれるよう、心身ともの更なるブラッシュアップを図っていきたいものである。

以上

16.08.26 守山裕次郎